

コラム第12回 「辛いことや失敗の先に見える景色は」



いよいよ卒業間近です。つい最近まで幼さが感じられた3年生も多くなりましたが、入学・転学当初と比べると頼もしくなったなあと感じています。卒業後に大学や専門学校に進学する生徒、そして就職する生徒、それぞれの道を歩むこととなります。見送る側の私は、卒業していく皆が社会生活の中で継続して力を発揮すること、そのために共に生きる人々に「感謝できる力」をつけて「人の役に立つ」社会人に成長していくことを願っています。

<私と感謝との出会い（経験→想像→感謝）>

私自身のことを^{かえり}省みると、家族や身近な友人以外に対して「感謝の気持ち」が意識できるようになったのは20歳前後だったでしょうか。部活動（演劇部）中心の大学生活をしていた私は、1回生時に学年リーダー、2回生時に^{まかく}企画^{しょうがい}渉外、3回生時に部長と、毎年何かしらの役職をいただいていた。その中で、役割を果たすことの大変さや上立つ責任、そして人間関係の難しさを嫌になるほど経験し、答えがなくどうしていいかわからない経験を繰り返す中、前任者の先輩たちの苦勞に気づいたのが始まりだったような気がします。

特に2回生時の役職「企画渉外」、その仕事のひとつだったコンパの引率が嫌で嫌で仕方がなかったものです。1ヶ月前までに参加者を確認して（個室が取れるか、料理が適当か、騒いだり一芸披露の場があるかなどを調べ）お店を予約し、先輩方に下話や根回しをし、当日は座席表や席くじなどを作り、部員30～40名を連れて「大学→地下鉄→夜の名古屋の街→コンパ会場（大きめの居酒屋）」へと徒歩で引率し、^{かんれい}慣例にならいコンパの司会やお酒・食事出しや接待をし、盛り上げのコールを先導し、帰りの引率では駅で部員の^{としやぶつ}吐瀉物の片付けをしつつ、歩けなくなった後輩たちをフォローし、その道中に先輩から今日のダメ出しや改善の説教を受けるという地獄のような役職でした（笑）

人の世話をしたり、細やかに気遣いをするにまったく不慣れな大学生の私です。どう動いていいのかわからず、何が正解なのか分からず、動くことも考えることもままならなかったことを覚えています。毎日の演劇の稽古や公演、その節目に年5～6回ある公式のコンパ。そのたびに憂鬱な気持ちになったものです。そんな時、仕事を手伝ってアドバイスしてくれる前任の先輩、説教したり怒ってくる厳しめの先輩、寄り添って話しかけてくる先輩方を見渡した時、それぞれが部内で役割を持って、その人なりに頑張っていることが分かるようになりました。関わりを通じて、自身が経験を積むことで、相手のことを想像できるようになった瞬間（感謝との出会い）でした。

<自分が関わる意味を求めて（課題意識→学び→理解）>

「人の役に立つ」という意識が芽生えたのは、それからかなり後の28歳頃だったように記憶しています。フリースクールの運営を始めた私でしたが、当時は^{しこうさくご}試行錯誤と失敗の連続でした。生徒と歳がそう離れていなかった当時の私は、生徒と仲良くなって談笑したり遊んだりすることは今よりずっとスムーズでした。ですが生徒に非日常の事態がおきた時——それは突如訪れ、無気力や意欲減退、稀にリストカットや薬の大量服薬等を伴いました——ただ無策

で無力でした。大学で心理学を学び、学習塾で勤めていた程度の私の知識と経験では、どう対処していいかも、普段の学校生活の中でどう予防できるのかも分かりません。

どうしたら生徒たちの負の面を理解し、悪い事態になる前に気づいて予防の一手が打てるのか。もしくは事態の変化にいち早く気づき、動くことができるようになるのか。考え、想像しました。ですが思い付くことはなく、日々の関わりやこれまでの経験だけではどうにもならないと感じ、専門学校や大学院の門を叩き、心理学に限らず人間科学、精神医学、福祉学、社会学等を学びました。そして、社会人になって課題意識をもって学ぶことが、いかに身になり、面白く、そして苦しいかを実感することができました。

大学院で特に身にしみた学びは、家族療法や家族システム論、人間中心のグループ論などです（これらの知識や理論の断片は、これまでのコラムや発表した論文にあるため割愛^{かつあい}します）。こうした専門的な学びの中で、聞きかじった話や本・テレビ・ネットで断片的に得た「ただの情報」と、学び続ける中で得た「知識や技術」との間に雲泥の違いがあることを痛感しました。そして正しいと思い込むことの怖さや、自分がいかに見えていないか・分かっていないかを出発点として人やものごとを理解しようとし続けることの意義を学びました。さらにどんな仕事においても、情熱や誠実さ、相応の知識や技術の習得（そしてそのバージョンアップ）、そしてたゆまぬ行動の連続が、職業人として自分の身を助け・他者を支える、「人の役に立つ力」になるのだと知りました。

<大人の階段を上る人へ（使命—継続）>

未来学園には卒業生がよく遊びに来てくれます。そして多くの卒業生が進学先や就職先の苦勞を語ってくれます。その際、その子が社会集団でより良くやっていけそうか否かを嫌が^{いや}応^{おう}にも感じる場合があります。その最たる違いは、今に「感謝できる人」と、今に不満をもち、学校や会社やそこで関わる人にいつも「文句を言う人」との違いです。今まさに、自分の周囲の人や環境に感謝をすることは、なかなか高度な能力です。それは、自分を客観的に見つめることができ、自分が学校や会社の一部であるという共同体意識をもち、今の境遇が自分の選択から来たものと認識し、そして自分と他者とを相対的に比較して他者を^{おもんばか}慮^{おぼ}ることができる、複雑で高度な技術です。一方で、いつも誰にでも不満や文句を言う状態は、現状を受け入れ対応できていない未熟さや自信のなさの表れであり、時に友人・知人を道連れにして陰気な連帯をつくり、いつの間にか所属する集団から孤立したり疎外される危険をはらんでいます。

未来学園を巣立っていく生徒たちは、その多くがまだ10代です。学校生活や友人との関係性、アルバイト等を通じて少しずつ大人に近づいています。入学前とは比べものにならないくらい、できることが増えています。ですが、まだまだ自分中心で、その日の気分や狭い思考の中に存在しています。子どもとはそういうもので、それでいいとも思います。ですが近い将来、そうした自分の^{がよ}我欲^{よく}を超える使命をもち、「人に感謝できる」ほどに様々な経験を積み、「人の役に立っている実感」が得られる日がくることを期待しています。私自身もまったく道の途上ですので、生徒たちに追いつき追い越されることを楽しみにしながら、日々を歩んでいきたいと思っています。 野中浩一 拝